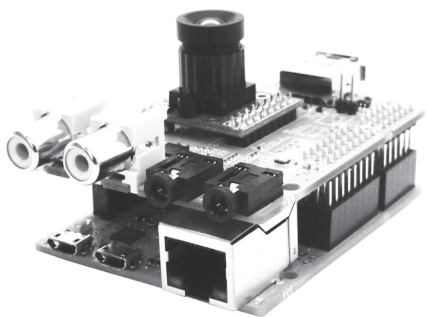


IOTの未来に向けて

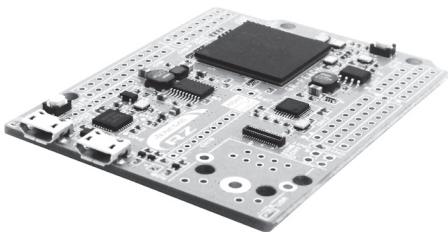
最新技術対応製品から具体例まで

組み込みシステム開発領域に強みを持ったITサービス会社であるコア。同社は、40年にわたる実績を持つマイコン・デバイス関連のシステム開発、最新のデータセンタ―を活用したクラウドサービス・運用、セキュリティサービスまで、幅広く時代のニーズに対応したサービスを展開している。

ETには毎年出展し、最新の組み込みソリューションを展開しているが、今年力を入れているのが新たなIoTテクノロジ―展も開催され注目されるIoT/M2Mの領域だ。2015年現在の市場に対応したボード、パッケージから、2020年の市場を見据えた次世



GR-PEACH



GR-PEACH AUDIO CAMERA Shield

2015年現在のニーズに対応した最新のボードソリューションで、CPUにネサスエレクトロ

代製品群まで、同社の組み込み開発技術とともに、活用の具体例までIoTをワンストップで実証するソリューションを紹介する。

なかでも注目の製品群が、ARMのCortex-Aシリーズを搭載し、クラウドベースでIoTデバイス開発を行える「GR-PEACH」と、準天頂衛星などGNSS（全地球測位システム）の信号受信機「COHAC」(コハクインフィニティ シリーズ)ブランドのラインアップだ。

世界初のmbed対応ボード

まずGR-PEACHは、IoTデバイス開発を効率的に行える

ニクス社のRZ/A1Hを採用、ARMのCortex-Aを使用し、ARMが提供しているクラウド開発フレームワークである「mbed」に対応した世界初の基盤製品となっている。

開発は、Web上で展開するARMの開発環境上で行い、クラウド型でプロトタイプ開発が簡単に行える。IoT対応の組み込みシステムは、これまでの組み込みシステムのような単体のデバイス開発とは異なり、複合的なシステムとなる。そこでGR-PEACHでは、ボードに追加ボードを差し込む方法で機能を拡張できる形をとっている。今回のET会場では、「カメラや音声を活用した応用事例、GR-PEACHにLCDパネルを組み合わせて表示するデモを紹介する」(エンベデッドソリューションカンパニー営業統括部長)としている。

GNSSの研究成果

もう一方の「COHAC」(コハクインフィニティ シリーズ)は、近い将来の新しいインフラ環境に対応する製品となっている。同社は、10年前からGNSSの基

礎研究を開始し、早くから対応製品を開発、現在実施中の次世代農業プロジェクトほか国の実証事業にも多く参加している。

GNSSでは、GPSよりも高精度な測位が可能となる。現在日本では実証機「みちびき」1機運用のため、本格サービスは行えていないが、2年後に人工衛星を3機打ち上げ、2018年にはサービス展開が開始される予定だ。そもそも現在広く使われている測位システムのGPSは、アメリカの人工衛星に頼った仕組みのため、どうしても同国に使いやすいうようになっていく。つまりGNSSサービスが開始されると、「利用範囲が広がりがイノベーションが起る」(同GNSS担当黒川涼主任)ことが予測される。

そこで同社はGNSS受信機の新製品コハクインフィニティシリーズ「LEXデコーダ」や同「QZS+GPSシリーズ」に加え、原子時計搭載基盤「ASURACSACII」などを活用し、位置と時刻を組み合わせ、更なる高精度な測位を実現する枠組みを提供する。さらに展示では、具体的に「ITS(高度道路交通システム)とIT農業、IT施工の分野で新たな世界の実現を目指す」としている。